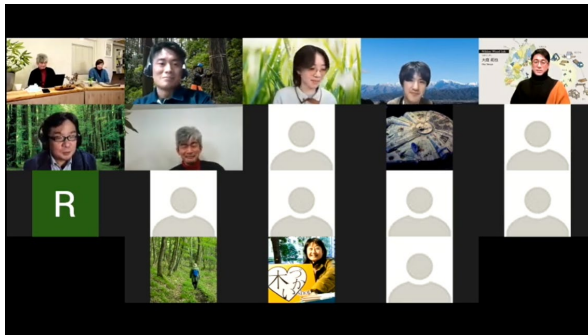


木育のオモテ 1月29日(土)

第3部 森と暮らしをつなぐ木育

コーディネーター： 古川 泰司（アトリエフルカワ一級建築士事務所）
出演： 大庭 拓也（株式会社日建設計 Nikken Wood Lab）
森本 達郎（森庄銘木産業株式会社 4代目）
奥田 悠史（株式会社やまとわ 取締役・森林ディレクター）
佐藤 歩美（慶應義塾大学 大学院生）
コメンテーター： 赤池 円（グラム・デザイン 代表／私の森.jp 編集長）

林業、木材産業、建築、教育に関わる次世代リーダーから、現在の取り組み、将来に向けた不安、希望、前向きな思いを聞きながら、ディスカッションを進める。大人コメンテーターとして私の森.jp を運営する赤池円さんが参加。



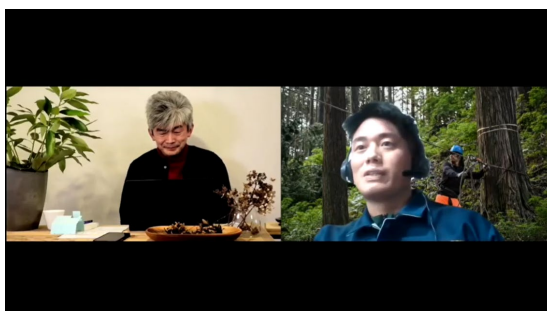
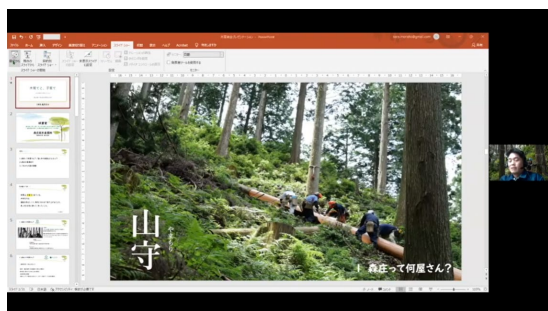
古川 木育の世界はどうしても木材活用の話が多くなるけれど、保育園の設計などをすると木を求めているのは子どもたちなんだと思う。第3部は実践的な話を中心に進めていく。

赤池 自社で運営しているサイト「私の森.jp」のタグラインは「森と暮らしと心をつなぐ」。どうやって木のことを日常に取り戻していくのが大事。それは心をどうやってつなぐかということでもある。そのことを考えながら聞いていこうと思う。

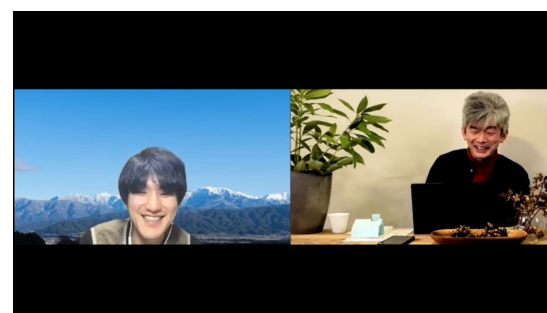
それぞれの森への取り組み、関わり方

森本 林業は子育てに似ている。大切なのは個性を伸ばしつつ時代に合わせて育て上げる

こと。自社は奈良県の林業と磨き丸太を中心とした製造販売業。私はその4代目。森林管理を行う山守。雨の日に行う小物の製作販売も。森庄が取り組んでいる森づくりは管理放棄森林を減らす事業、獣害被害を減らす取り組み、木の良さをお届けする普及活動をしている。木に関わることは好奇心を引き立てられ、感謝の気持ちがわいてくることだと思う。世代を超える尊い仕事、次世代に森の豊かさを残していく仕事。



奥田 「森をつくる暮らしをつくる」を掲げている。人を動かすために豊かな暮らしづくりを通して森に関心を持ってもらう。夏は農業冬は林業を行う、農も林も循環するような事業を行っている。地域の資源を使ったクリエイティブ。伊那谷のカラマツ、アカマツを活かした製品展開。経木など。適材適所のものづくりをして、森はすごいなと思っている。地域にある資源を生かした暮らしづくりの提案、森と暮らしをつなぎ直すにはどうしたらいいかと、担い手育成や企業との森づくりを進めている。例えば乗鞍高原でやっている木を活かすために、釘も接着剤も塗料も使わないベンチ作り。腐ってもいいじゃない、と。みんなで毎年作るベンチ。風景が風土を作り、それがその土地の文化となり魅力となる、そんなことを目指している。



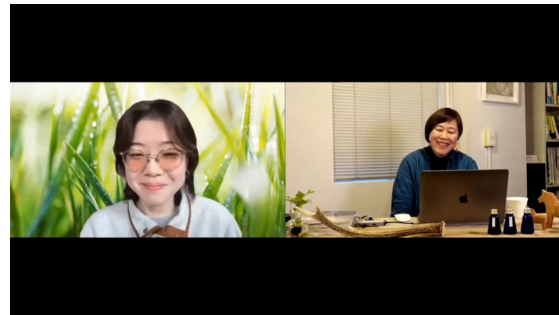
大庭 「たくさんの木」と「つな木」と。中大規模の建築づくり、都市づくりをやる企業。その中で木しか使わないラボに所属している。作れば作るほど地域や資源がよくなるものがないか、それを実践するために作ってもらったラボ。「たくさんの木」と同時に大切なこと。ちゃんと伝わっているか、自己満足になっていないか。そこから生まれたのが地域材と専用のクランプを使って、誰にでも使える作れる「つな木」。暮らしのニーズに「地域の木材」と「自分の手」でそれにこたえることができる。子どもたちとつくる神社での土

日だけのカフェ、高校生がつくる街の通りのコワーキングスペース実証実験など。
CLT で作る木の原っぱのようなイメージの小学校建築。様々なところに木育のサインがある。「つな木」のワークショップも行い、子どもたちに森と暮らしのかかわりを。木が大好きなので「木づかい」と「暮らし」をつなげる大小のインフラを作っていきたいと思っている。



古川 大庭さんは自分がやっていることが社会に対してどう役立っているか、それを足しげく林業地に通ってその人たちと対話している。日本の森を守っていくのはどうか、と自分に問いかけている。今、木造ブームで何でも木造で作る、という風潮があるけれど、山のことを顧みていないことが多い。そこでちゃんと山を見るところを意識的にやっているのがすごいと思う。大きい企業は意外とそこが抜けている。森本さんは森林資源がどのくらいあるかという、境界確定という地味な作業をやっている。それが行われないと、山にどのくらい資源があつてどのくらいの木材を使っても持続可能な林業が可能なのか、というエビデンスが出てこない。その一番基本が境界確定で、森林資源データが集められる。それをしっかりやっているのが森本さんで、それが大庭さんの仕事とつながる。そこに暮らしとつなげるという奥田さんが出てくる、このトリオは面白いなと思っている。

佐藤 「森の木々、子どもの日々」。人間が幼児期に自然と触れることについての重要性の研究など。スウェーデンの自然保育の手法を学ぶために半年滞在。2～5歳の子どもたち60人と週4回、3カ月間を保育所インターンとして過ごした。子どもたちは森の中で想像力を使って遊ぶ。「森の中でも落ち着いて主体的に遊ぶこと」が当たり前になることが保育のゴール。スウェーデンの森と日本の森は違う。日本の森は危険なことも多い「山」のことを指す。安全に活動できる森が限られているので木質化された屋内での木育、安全な山での森育を実践する意義・価値は高い。自然に触れることで非認知能力が育つと言われるが、木育・森育は「ある能力を身に付ける」よりも、もう一歩先のことではないかと思う。自然環境と人間の関係性を見直すこと。地域や社会全体で木育・森育活動に取り組んでいくことが大切。私の好きな言葉を最後に。森を育てるように人を育てる。人を育てるように森を育てる。森本さんの話と最後でつながった。



赤池 森本さんが森の中で好奇心や感謝を育てるということを、山守、という伝統的な仕事を今に引き継ぎ、次世代につなぐ中継ぎの役を買って出ているということが素敵だなと思う。

奥田さんはいったいどこから手を付けたらあんな風に展開していかれるのかと。社会課題が多い中で農林業をくっつけて、生き生きと仕事をする人をハントして来て。その先に昔からあるものを発掘して新しいものを作るという発想力。森林とクリエイティブという言葉がつながっていくのは、すごく心強いと思った。風景が風土をつくる、これを維持したいという気持ちが小さいころから育っていけば、風景をもっと大事にしようと思うのではないかなと思う。

大庭さんの「つな木」と「たくさんの木」は大きいことと小さいことの連続性がそのままデザイン、仕組みになっているのが素晴らしい。クランプで作る仕掛けがそこそこ大規模建築にも行かされるという連続性。子どもたちがそれで物を作る体験をして、自分の居場所を作ることができる、それはものすごくクリエイティブでワクワクする体験だと思う。

佐藤さんの話…。何から話そうかと思うくらい胸がいっぱいになった。在野の哲学者、内山節さんのキツネに騙されなくなった、という話。森の妖怪という話はたくさんあった。森の中で感じ取れる目に見えない力、創造する力、それを高度成長期に失ってきてしまった。自分たちを含んだ森と一体化した自然（じねん）は、風景や風土を作っていくうえで非常に大切な感覚。スウェーデンの自然はそれとは違うとは思いますが、大事にしていきたいことかなと改めて思わせてもらった。

森と私たちの距離 生活に森を取り戻すために

佐藤 安全に森で遊ぶということで躓くことが多い。日本では安全な場所を探すのがとても大変なので林業のプロの方に協力してほしい、一緒に考えてほしいと思う。

森本 安全というキーワードと日本で一番危ない仕事と言われる林業の現場。改めて仕事としての安全性を、自信をもって言える林業をやっている人が少ない。そこと安全性を議論できるようになってくれば、木育の議論は一気に進められると思う。

佐藤 リスクを全て取っ払ったところで活動することは、実はあまり求めている。子どもたちの力を伸ばすために。リスクは少し残してもハザードはなくす。手を入れ過ぎないということが鍵になると思う。

奥田 森と付き合うのは経験値のいることだと思う。子どもによってもそれが違うので、何かステップが必要かと思う。森にあるものを使って何を学べるかという軸を立てる。そのため森をフィールドにしたワークショップを行うことも多い。森に入りたくなるためのデザイン、関わりしろ。森での過ごし方を知らない人たちが一気に入ると荒れそうだなと。

大庭 木造化された都市の施設がどうやって森や地域に対して想像力を掻き立てるか、ということに興味がある。都市で育った自分の子どもが、自分の設計を見て地域を大切にしたいと思うか。森と地域との関係性をデザインしていくかどうかを模索していると、いつの間にか奥田さんや森本さんと友達になっていた。そういう関係性のデザインのセンス、作法というようなものを、学んで行きたいと思った。

古川 森と我々の距離の取り方が難しい時代になっている、今日の 4 人はその距離の取り方をそれぞれに試行錯誤されている方だと思う。森との距離感をどう詰めていくか、人ごとにしないということが一番大切。生活に森を取り戻していくこと。森と共存しているのだし、森がないと生きていられないのだから。

第3部 (アモテ)

森と暮らしをつなぐ木育

森本達郎 さん

奈良県の森庄 (1927年 生まれ)

4代目。

子供達に
安全に森に
来て欲しい
林業の現場で
安全は主。



赤池さん

私の森はP
森と暮らしと心をつなぐ
日常性。この中にどう入る
これを身近感化する



自然と自然
想像性を
作る
根元

- ・林業は子育てに似ている。
長い時間をかけて。
- ・奈良県で山守をしている

- ・木製品作りもやっている。
- ・林業の現場から情報発信

木を使うのは好奇心と感謝の気持ちで育てる

奥田 悠史 さん (株)やまとや

森をつくる暮らしをつくる

①農と林

夏は農業冬は林業

→農 林でできることでも生きていける
いつかなくなりそうなものは
使わない、というコンセプトで。



②ものづくり

家具に使われる木材は90%が外国材
信州 経木：アカマツは経木に直している

- ・釘も接着材もつかわないハンチ。
「さてもいいじゃない」

・風景が風土を作る。

これを維持しようとする気持ちを子供達から
子供達のしるもろさう。

森に近づくための
デザインが必要。

リスクを残しながら
ハザードは取り除く。

内山タカシ
「日本人はなぜヤシネ
にたまたまなく
なったか」

大庭 拓也 さん

日建設計

福岡生まれ 山に近くに生んで
いる。

生命や環境に
良い建築物を目指し。

日建 ウッドラボ を立ち上げた。



オリンピックの有明 (国産材 3,000m³ 使用)
たくさん木を使ったけど...

- ・木を使うだけで自己満足になっていないか?
↓ 林業地に足を運んで対話をしている。
- つな木 プロジェクト。地元の
どこでも手に入る規格の木材を使って、
自分達で作れる

ex.) 大通りのイベントで高校生が空間
作りをした。

CLT 徳島県立学院小学校

→木に情報を入れ込んだ。

森や木を
人ごとに
しない!!

地域と都市との
木を通した関係性のデザイン

佐藤 歩美 さん

慶應義塾大

スウェーデン留学

「教育社会学」専攻

2018.4~7. にスウェーデンへ
(サーラ市)

森と生活がとても近い。

人性の中で一番おたやかな時間。

保育所にインターンで参加

保育のルールは... 森の中で子供が落ち着いて
遊ぶこと。(森があたり前になる)

Point! そのために 衣・食・住を森でする。(特に食)

日本に戻って... 危険な動植物
日本の森はほぼ山 自然災害
持ち主がいる。

大人による導き → 教え、遊び?

→ 多様性重要! 非認知能力が育つ。



好きな言葉
森を育てる
ように
人を育てる
ように
森を育てる

自然受権
がある

木育・森育は...
自然環境と人間の
関係性を見出す